

<ご挨拶>

50周年を迎えて

日本教職員バドミントン連盟
会長 関場 武



このたび日本教職員バドミントン連盟は、めでたく創立50年を迎えました。まさに慶賀すべきことでもあります。これまで本連盟に対し長年に亘りご支援を賜った文部科学省ならびに公益財団法人日本バドミントン協会をはじめ、各都道府県の教職員バドミントン連盟、そして本連盟の会員各位に対し、深甚の謝意を捧げる次第です。

本連盟を起ち上げた頃、競技スポーツとしてのバドミントンはまだ世間に広く認知されておらず、体育館等の施設も数が少なく、決して良好とは言えない状況にありました。そしてスポーツというものに対する一般の認識も低く、スポーツに入れ込むことの出来る者は、抜きん出た才能を有する者に限られ、学校体育はあっても、生涯スポーツといった観念は皆無に近いものでした。そのような中であって本連盟を創設して下さった方々の並々ならぬ情熱とご尽力には、今更ながら頭が下がります。そしてまた、それを受け継ぎ発展させ、今日ある姿にまで築き上げて下さった数え切れないほどの多くの方々にも、心より御礼を申し上げます。ほんとうに有難うございました。

東北大震災、それに続く原発事故を引き合いに出すまでもなく、この50年、世の中では様々なことが起こり、人々を取り巻く環境は大きく変わりました。バドミントン界も然り。オリンピック正式種目としての認定、ラリーポイント制の導入をはじめ、ルール、ラケット、ウェア等が大きく変わりました。ラケットはスチールシャフト、カーボン、チタン云々と次々と新素材を使用した新製品が開発され、ウェアは白一色からカラフルなものへと転換し機能も向上しました。そして、用具の進化・ルールの改訂に伴い、プレースタイルも大きく変わっています。練習や試合中に絶対水を飲むなど厳しく言われ、兎跳びは必須、ラケットはちゃんと振りかぶれ、ポイントをコールするときは必ず当該サイドを指し示し点数を言うべしなどという指導を受けてきた小生のような者にとって、近年の様相はまさに隔世の感があります。

さて、会員の皆様は、日頃から、多忙な校務を縫って時間を作り、優れたプレーヤーの育成、バドミントン部の和の形成と実力向上に努めておられることと存じます。世の中の籬がすっかり緩み、学生・生徒や選手・保護者の考え方・行動が急速に変化しつつある中で、皆様方のご苦勞は如何ばかりかと拝察されるところであります。我々教育に携わる者にとって一番大切なことは、真に広い教養とそれに裏付けられた他者に対する深い思いやりを、学生・生徒にしっかりと身に付けさせることであると小生は考えております。たとえ世の中や教育界がどう変わろうとも、変えてはいけないもの、崩してはいけないものはそこにあると思っております。部活のほかにも学校体育としてのバドミントンがあります。多くの生徒・学生にバドミントンの楽しさ、身体を動かすことの楽しさを覚えさせる。これぞ我々に課せられた大事な責務のひとつであると思っております。

つきましては、皆様方におかれましては、今後とも根気よく地道な指導をお続け下さり、プレーヤーとしてのご自身の鍛錬にも努められますよう御願ひ申し上げる次第です。そして、本連盟の事業等に積極的に加わっていただき、日本教職員バドミントン連盟がさらに強固なものになり、100年200年と存続・発展して行けますよう、一層のご支援・ご協力を賜わりたく御願ひ申し上げます。末筆になりましたが、これまでの皆様方のご芳情に再度感謝申し上げますとともに、今日ここに50周年というめでたい節目にめぐり合わせた幸運を、皆様と一緒に喜び分かち合いたいと存じます。

<ご挨拶>

連盟50年 誕生の頃を回顧して 次の50年に向かって更なる前進を!!

日本教職員バドミントン連盟
初代理事長（現顧問）平田登志郎



いつの間にか半世紀。本連盟の設立に続いて初代理事長の重任を経験した私にとって、50年目という発展と歴史の節目の年を迎えた事は誠に感慨深いものがあります。

連盟設立の頃の、今からみると神話的とも云える諸々の経過～新組織結成特有の生みの苦しみは、今は80歳半ばを過ぎた私にとっては、30代半ばの血気盛んな頃の遠い思い出となりました。

「屋上屋を重ねる……」との批判が出たのも、反面には当時の日本のバドミントン界を引っばっていたのが、教員の方々であった事を物語っているものでした。しかし、私どもの「教職員連盟は日本のバドミントン界にどうしても必要不可欠」という信念は月日とともに高まりました。

思えば当時、日バ副会長の森友徳兵衛氏の駿河台にあったご自宅に、故今井 先先生と私が招かれたのが昭和36年（1961）の年の瀬も押しつまった頃だったと思います。そこで森友・今井両氏の「連盟発進」の不退転の決意を承けたまりました。年あけて37年1月の日バ総会で満場一致の可決～同年4月1日、わが教職員連盟は、その新しいスタートを切ったのであります。

話は前後しますが、発足に先立って初代会長として栗本義彦先生をお迎えするべく、今井、森友、私の3名で日本体育大学の学長室に参りました。最初は中々「うん」と云われなかったのが、「全国に在る先生の、教職に在る教え子が待ち望んでいるのですから……」と心底からの説得に、にっこり笑って「よし」と受けて下さいました。今井、森友両氏の“ほっ”とされた顔が印象深いものでした。また、昭和31年頃からの同志里見・小泉（弟）や故池田・磯野諸氏と共に、森友（日バ理事長）、今井（常務理事）のご紹介で、お茶の水駅東口の岸体育館（前体協本部）の一室にあった当時の日バ事務局で常務理事会の皆さんに紹介されて、ご挨拶申し上げに参りました。席には岡山の毛利、故人となられた熊本の伊藤、福岡の和田、新潟の市嶋の諸先生（屋上屋の方々）から、新規参入の後輩を暖かく迎える眼差しを感じたことを記憶しております。

翌昭和37年8月（1962）第1回の大会と研修会を東京・文京区、地下鉄本郷三丁目駅前の、当時私の勤務校であった文京二中（現区立本郷台中学校）のコート3面、参加16県の規模で開催にこぎつけました。本年度の第50回の松山大会と比較すると誠に今昔の感ありで、50年の発展の歴史の重みを感じるとともに、JEFの今日あるを期して「連盟発進」の不退転の決意を実現させた今井先先生、森友元日バ理事長の先見と、今は故人となられた諸先輩方や盟友の諸氏の霊に感謝と報告の辞とします。最後に次の50年目、連盟発足一世紀に向かって、わが国、そして世界のバドミントン界に貢献することを祈る次第です。